# 安源寺館跡
# 緊急発掘調査報告書

1991−3

中 野 市 教 育 委 員 会

# 安源寺館跡
# 緊急発掘調査報告書

# 序

高丘台地は、遺跡の宝庫で主なものに立ヶ花遺跡・安源寺遺跡・県指定の栗林遺跡等があります。安源寺には山城と居館跡があり、山城は安源寺集落の北東にあり、館跡は小内八幡神社の西北部にあります。

今回、県営畑地帯土地改良事業に基く、農道拡幅工事に伴い北信地方事務所長と中野市長との委託契約に基き、平成２年12月から平成３年３月にわたり調査したものです。

調査は団長は日本考古学協会員・中野市文化財保護審議会々長金井汲次先生にお願し実施いたしました。調査では館の堀の形態、土塁の敷幅、構築土はどが判明し、遺物では堀底から珠洲系陶器片が出土しました。館と山城との関係など今後に残された問題は多くあります。

調査にあたってご協力ご苦労をいただいた調査団・作業員・安源寺の区民の皆様方に、心から感謝とお礼を申しあげます。

平成３年３月

中野市教育委員会教育長　嶋 田　春 三

# 例　　言

1.　この報告書は、県営畑地帯総合土地改良事業に基づく、農道拡幅工事に伴い、中野市安源寺933－１番地外に所在する、安源寺館跡の西側部分の調査報告書である。

2.　発掘調査は、北信地方事務所長と中野市長との委託契約に基づき、中野市教育委員会が調査主体となり、実施した。

3.　発掘調査は、平成２年12月19日～23日まで行い、平成３年２月より遺物及び実測図の整理を行い報告書を作製し、平成３年３月末日発刊した。

4.　発掘調査の作業分担は次の通りである。

発掘　　全員

測量・記録　　湯本栄一、池田実男、檀原みち江、池田きよ子、藤沢高広

写真撮影　　檀原長則、藤沢高広

5.　報告書作製の作業分担は次の通りである。

実測図整理　　秋山恒巳

トレース　　山崎のり子

6.　本文執筆　　檀原長則、徳竹雅之

7.発掘参加者は次の通りである。

小林資成、佐藤芳太郎、関　増行、神田政博、樋口義政、湯本栄一、池田きよ子
池田正子、檀原みち江

8.　発掘調査には、地権者今井史郎氏の御理解と御協力があり、安源寺区の方々からも、多くの御援助を賜った。

# 目　　次

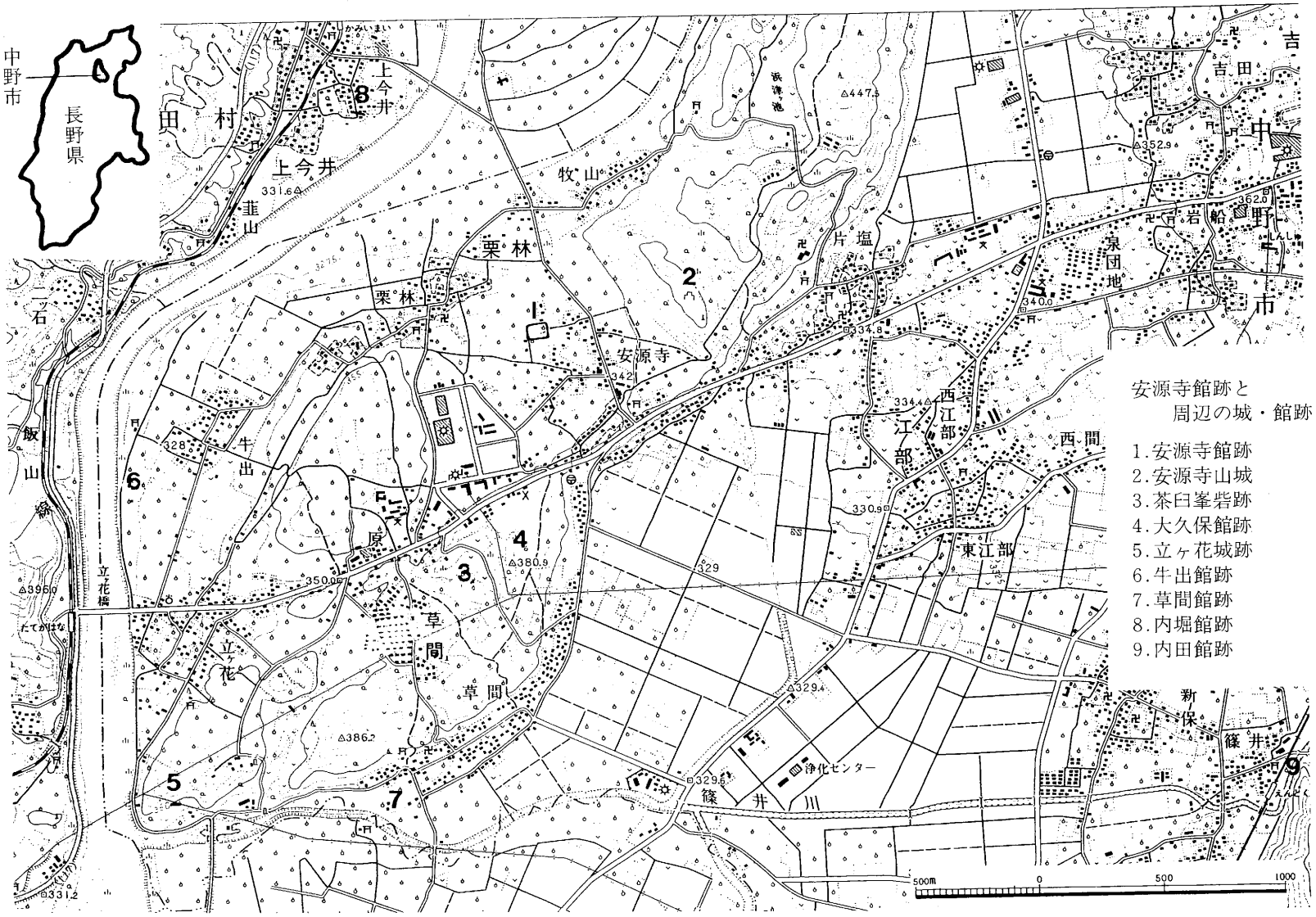
序
例言
安源寺館跡の歴史と環境 …… 5
　1．立地と環境 …… 5
　2．安源寺集落の歴史 …… 7
　3．館跡の経過 …… 8
　4．安源寺の山城 …… 10
発掘調査 …… 11
　1．調査計画 …… 11
　2．調査経過 …… 11
　3．遺構 …… 13
　4．遺物 …… 17
調査結果 …… 18
　　結語 …… 18

## 挿　図　目　次

1．安源寺館跡と周辺の城・館跡…… 4
2．安源寺館跡位置図…… 6
3．安源寺館跡『長野県町村誌』所載…… 8
4．館跡周辺の公図…… 9
5．安源寺城要図『日本城郭大系』所載…10
6．安源寺館跡調査全体図……12
7．第1トレンチ断面図……13
8．第2　〃　……14
9．第4　〃　……14
10．第6　〃　……15
11．第7　〃　……15
12．第5　〃　……11
13．遺物拓影図……16

## 写真図版目次

1．館跡遠景・残存土塁……19
2．調査風景・第2第4トレンチ……20
3．第5第6トレンチ
　第4トレンチ土塁敷下層……21
4．第6第7トレンチ
　安源寺城の土塁と掘……22




第１図　安源寺館跡と周辺の城・館跡

# 安源寺館跡の歴史と環境

## (1) 立地と環境

善光寺平（長野盆地）の北端は、高社山（1351.5m）によってさえぎられている。

その南方に広がるのは、志賀高原より流出した夜間瀬川によって形成された中野扇状地である。その扇末は、長丘・高丘丘陵（西部丘陵）の東麓で終わっている。この丘陵は、南北6.5kmに及ぶもので、最高所は、標高355m程で、東麓からの比高差は、約100mである。

千曲川はこの丘陵の西方を流れ、丘陵南端の立ヶ花地籍で、峡谷に入る。現在の地質学ではもともとこの付近を千曲川が流れており、盆地の沈降とこの丘陵の隆起に対して、下刻作用を続けているとされている。

この丘陵の南方は、台地状になっており、ゆるい傾斜地は、耕地化されて集落が発達しており、山ノ内町・中野市の西の交通の要衝として道路が整備され、工場の進出も盛んで、近い将来、上信越高速道のインターチェンジの開業も予定されている。

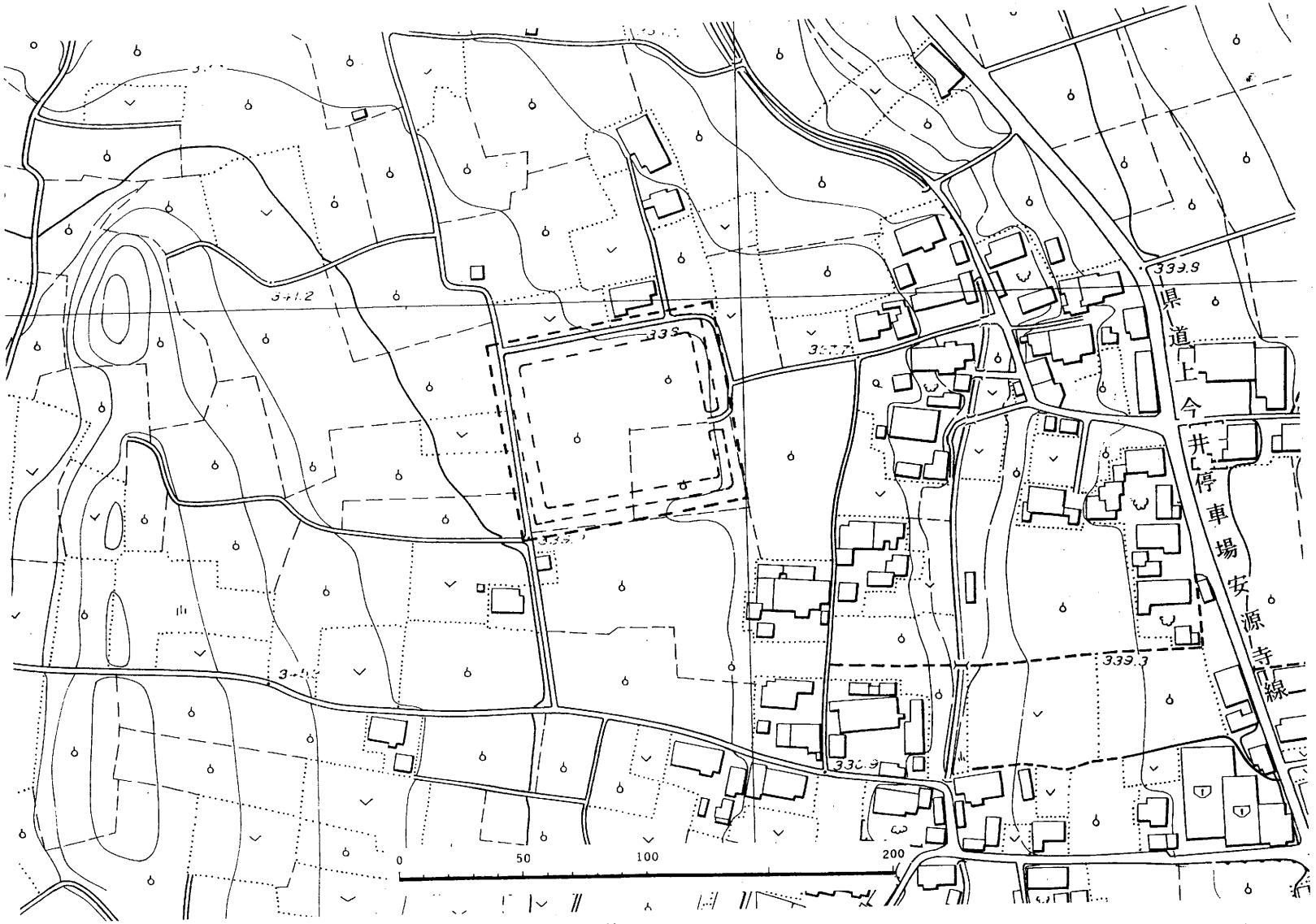
この高丘台地は、遺跡の宝庫であって、旧石器時代終末の遺跡から始まって、縄文前期後葉の立ヶ花遺跡、縄文中期から弥生後期・中世に至る安源寺遺跡、県史跡の弥生中期後半の栗林遺跡などがあり、さらにこの台地一帯の斜面に60有余基数えられる、7世紀後半代から始まる須恵窯址群などが著名である。

安源寺遺跡や、小内八幡神社の所在する、丘頂部から西北面にかけてはゆるい傾斜地で凹地となり、西方には台地状の丘の流れがある。この凹地の西方の東面僅かに傾斜した位置に所在するのが、安源寺館跡である。

現状は東方から北方・西方に道路がめぐり、館内はりんご・アスパラなどが植栽されている。

南東部には土塁の一部、高さ2m・基底幅4m・延長20mが残っている。

この東北方500mの位置に安源寺山城があり、その中間には八幡山安源寺跡があり、その西方に宝筐印塔や五輪塔が残されている。




第２図　安源寺館跡位置図

### (2) 安源寺集落の歴史

天正10（1582）年は、この郷土にとっては変動の多い年であった。約30年に至った、武田氏の領国支配も、３月、武田家の滅亡によって終りをつげ、織田氏旗下の森長可によって川中島地方が領有されたが、それも束の間、６月には、本能寺の変によって、信長が自殺し、森長可は、本国美濃に逃げ帰った。

その結果、上杉景勝が、ただちに川中島地方に進出し、武田氏の進攻によって越後に亡命していた村上・高梨氏などは、約30年ぶりに郷土に還住することができた。

それによって；同年８月付の、「本領は先忠者がいるので、残る安源寺周辺の２千貫（5000石）の地を高梨頼親に与える」（「上杉景勝宛行状」高梨文書）の文書が残っている。数年の後、頼親は、同族菅小島氏が居た、中野小館の城に入ることができたとされている。

天正11（1583）年11月７日の上杉景勝寄進状には「任望之旨、常楽寺・安源寺進置之候(以下略）」とあり、円慶寺に寄進されている。（常楽寺文書・信史16）これによって中世この地に安源寺と称する寺が存在したことが判明した。

文禄２（1593）年９月13日の高梨頼親安堵状には「庄内　立神藤八郎」は「庄内神主職」の本領安堵（片山文書１信史17）されており、ここに神社（小内八幡神社）が存在していた。

集落名の初出は、慶長16（1611）年10月18日の堀直寄判物の「安源寺、草間、江辺、片塩４ヶ村之屋地、来春より新田申付候、安源寺村之肝煎引入、可然様可馳走候、（後略）」で、廃寺後、寺名がムラ名となったことがうかがえる。

宝永３（1706）年の幕府領確定までは、森忠政領から始まって、飯山藩領など、幾多の変遷を経ている。

村高は、「慶長打立帳」187石、「天保郷帳」290石余、延宝７（1679）年、家数69、人数、男169・女148、馬６、となっている。

馬市の復興と八幡社の再建は、寛文５（1665）年、松平遠江守の時代に飯山藩の援助で行われ、本殿を再建している。安永（1772～81）からは、幕府中野陣屋から紋幕・高張提灯が貸与され冥加永100文を納め「御幕の市」と呼ばれていた。

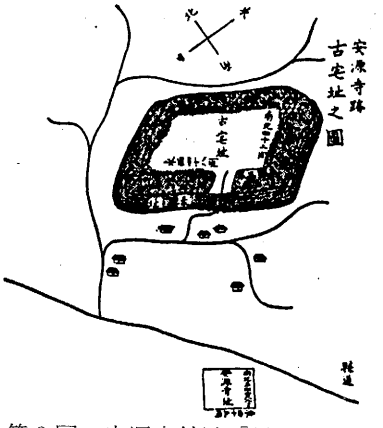
明治初期、同村丸山要左衛門の主導によって行われた、下水内郡上今井村（現豊田村上今井）地籍での、延徳低湿地の水害を防ぐための、千曲川を直流させる堀割工事は、有名である。

### (3) 館跡の経過

明治17（1884）年成立の『長野県町村誌』〔活字本 昭和11（1936）年長野県町村誌刊行会〕の安源寺村の項には、明治11（1878）年、村誌草稿成るに付御検校を希望す、とあり、「古宅址」の頃に、「本村の西北間、字堀脇にあり。回字形をなし、四方の残塁遺濠現存し、最も堅固なり。某氏の住居せしや不詳。恐らくは高梨氏の幕下某居城せしならん。後人の正考を俟つ。」と記載され、図の如く土塁南北42間・東西48間、大手を東面中央北寄りに設け、土塁は四周完存に描かれ、濠もめぐっている。

このように、明治初年までは土塁が完存し、堀も近年まで、東面の北寄りの一角は水をたたえていたが、そこを通る道路の拡張工事の時、埋められたといわれている。

現存の土塁は、南面東寄りにあり、東西方向に長さ21m・基底幅4.5m・高さ2mの規模で残っている。



第3図　安源寺館跡『長野県町村誌』所載 成立明治17年(1884)

この土塁は、腐植土の含まれない良好な粘土で構築され、中野土雛の原料土として採取されたと言われ、裾部も耕作のため削られている。この土塁の西方約10m程は、延長して畑地が盛り上がっており、近年まで土塁が残存していた可能性があり、今回の発掘の結果とも一致している。

先にも述べたように、東からの道は坂を登って平らになり、大手の北で直角にまがり、北面の堀の部分は道路となっている。平成2年12月調査時は、西面の堀も道路となっているが、平行せず、南方部の道は堀外であった。南面・東面は畑で、堀の部分は凹地となっており、残存する土塁の南方の、畦畔までの凹地の幅は、8m程である。

従って、東面の堀の部分も含めた長さは、推定84m、北面同88m、西面同76m、南面同88m程とみられている。

ところで、千曲川をへだて、下水内郡豊田村の千曲川沿いに館跡が3ヶ所ある。

1．上今井古屋敷（風呂屋敷）

2．同　　堀のうち（臼井氏宅地）

3．笠倉　割田氏宅地

このうち2は、上今井集落の東、千曲川沿いにあり、規模は55m×60m程の方形で、高さ約2.5m～3mの土塁と、幅約10mの水堀がコの字形にめぐらされ、南方にはみられないか、

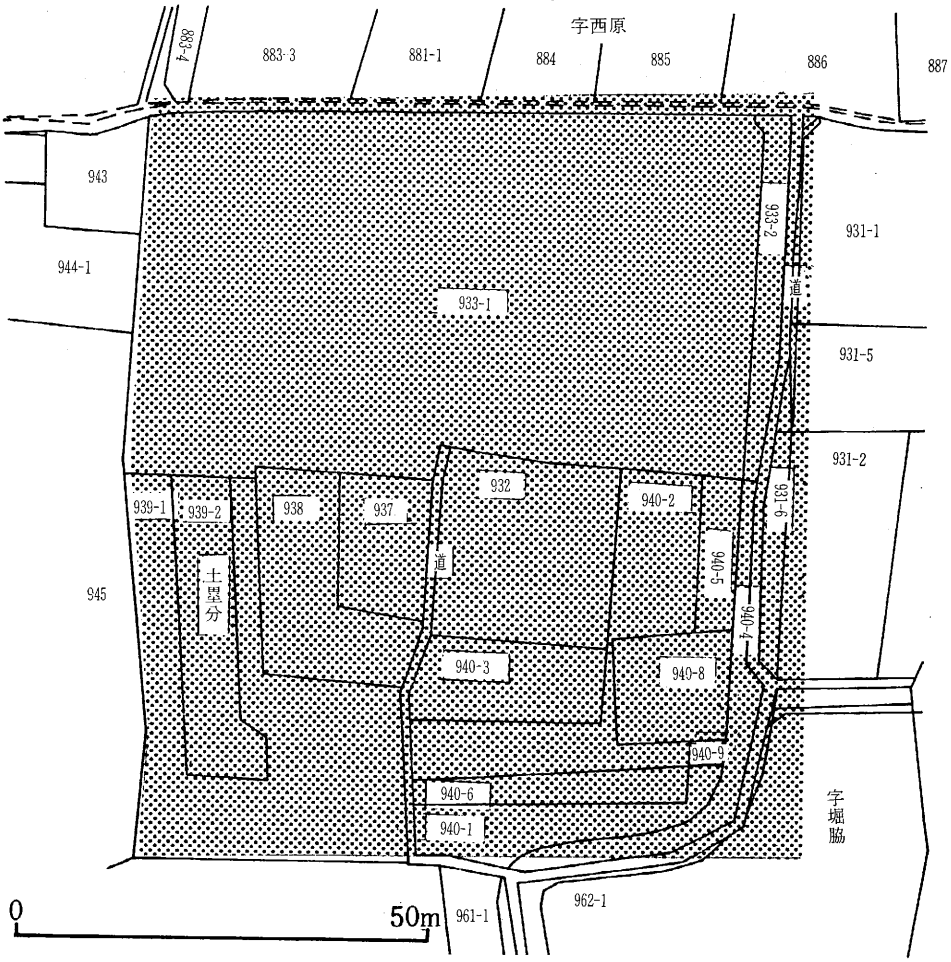
これは千曲川の流路を、防御線としたためとされている。

また、3.の笠倉の割田氏の館跡も、東方は千曲川畔で、西方と北方は深い堀がめぐり、それに沿って土塁がめぐらされている100m四方位の館跡である。

この二者のうち後者は、地勢からみて、築館時期が遡古すると思われ、前者が新しいと思われる。栗岩英治氏によれば、「2.は天正6（1578）年に景勝と勝頼が和睦し、飯山城についた下水内郡の残った半分も、勝頼の領地に帰したので、替佐城の必要のなくなった時以後であろう。」とされ、神社も北方に正しく安置し、地割りも実施されているので、戦国時代も終り頃の築館と指摘されている。

安源寺館も、明治初年までは、四周の土塁が完存していたことが確認されている。今回は僅かな調査面積ではあるが、希少な遺物の出土状態からしても、あまり長期間の存続を裏付ける資料に乏しかった。以上から、豊田村の臼井氏宅館跡と、接近した存続年代と考えられる。

今後は、これらを含めた広域の館のあり方を探るとともに、さらに安源寺館を、高梨氏との関係にとらわれることなく、多方面からアプローチする必要があろう。

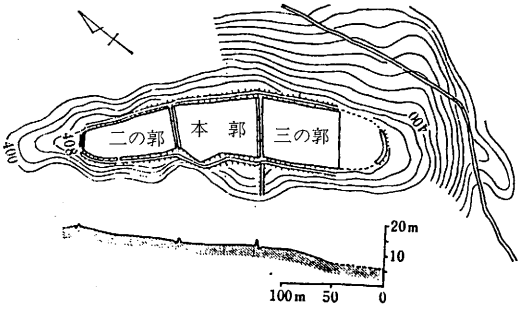



第4図　安源寺館跡付近公図

### (4) 安源寺の山城

安源寺の山城は、安源寺集落の北東に位置し、比高差70ｍの丘頂部にある。この丘の流れは、北西～東南の方向に約500ｍに及んでいる。この中心部の200ｍにわたって遺構がみられ、本郭は長方形（80×60ｍ）を呈し、左右に基底幅約６～８ｍ・高さ約２ｍの土塁が残り、２の郭は90×40ｍ、３の郭は120×60ｍほどの規模で、郭の間には空掘がある。

この３郭の周囲を、段郭がめぐり、南面の傾斜面にも所々段郭が設けられている。この主郭部から一段下がった北側の位置に、傾斜したままの段平地がみられ、先の段郭と西方で連なっており、住民の避難所との見方もできる。




第５図　安源寺城要図『日本城郭大系』から

この城の東麓は、古代からの交通の要衝で、この城からは、中野平から川中島地方まで眺望できる、景勝の位置を占めている。

通説では、この城は防備面の普請が不完全で、未完成の城といわれている。

東麓の片塩地籍の大徳寺の位置も、高梨氏の旗下に属する、江部氏の館址との見方があり、大手もこの方面に求められるが、安源寺館とはほぼ等距離の位置にあり、館と山城の関係は、確実には特定できない面がある。安源寺館と密接な関係があるとすれば、この山城の歴史的経過から、現状の残された遺構は、安土桃山時代を背景とした平山城とみられ、山城→平山城→平城と変遷する経過の中で、この地方としては、数少ない例のうちに入る。

未完成の城といえば、陣城的な要素もあることであり、館と城の関係、遺構ともし存在するとすれば遺物の関係を更に検証し、史料面の欠を補って、築城者やその背景を、更に追及する必要がある。

# 発掘調査

## (1) 調査計画

高丘台地は、夏季になると降雨に恵まれず、しばしば旱魃にみまわれることがある。このため、畑地帯総合土地改良事業として、畑地帯灌漑事業が実施され、続いて道路の新設・改良工事が、北信地方事務所によって実施されている。

平成２年度の事業で、この安源寺館跡の西側の道路が５ｍに拡幅改良されることになり、中野市教育委員会は、長野県教育委員会の指導を得て、一部国庫補助事業として発掘調査を実施した。

調査面積は限定されたものであったが、地権者今井史郎氏の御好意によって、りんご園の中に直交してトレンチを設けることができたので、堀・土塁の構造が、具体的に察知することができた。

調査団の編成は、次のとおりである。

| | | |
|---|---|---|
| 調査団長 | 金井汲次 | （日本考古学協会員） |
| 〃 主任 | 檀原長則 | （　〃　） |
| 調 査 員 | 池田実男 | （長野県考古学学会員） |
| | 藤沢高広 | （　〃　） |
| 事 務 局 | 小野沢捷 | （社会教育課課長） |
| | 池田　剛 | （　〃　係長） |
| | 徳竹雅之 | （　〃　学芸員） |

## (2) 調査経過

12月19日　（水）

バックフォー搬入。雨天のため作業中止。

12月20日　（木）

平板により地形測量を行う。調査区の設定を行い、南側（第１トレンチ）より掘り下げを開始する。

堀の規模、埋没土上に土塁の構築土などを確認する。

12月21日　（金）

館南方より、第１トレンチを道路と平行に、バックフォーで遺構面上まで掘り下げる。第２トレンチ道路と直交、第３トレンチ平行、第５トレンチまで掘り下げる。

堀は、西側南方で、やや道路敷分より東にずれていることが判明。堀の埋土は、淡黒褐色土で、地山とは明瞭に識別可能で、上に旧地山土の黄色土（土塁構築土）がみられる所があった。

第２トレンチ表面から－180cm下に珠洲系陶器片出土、第４トレンチ－220cmで珠洲系陶器片出土。

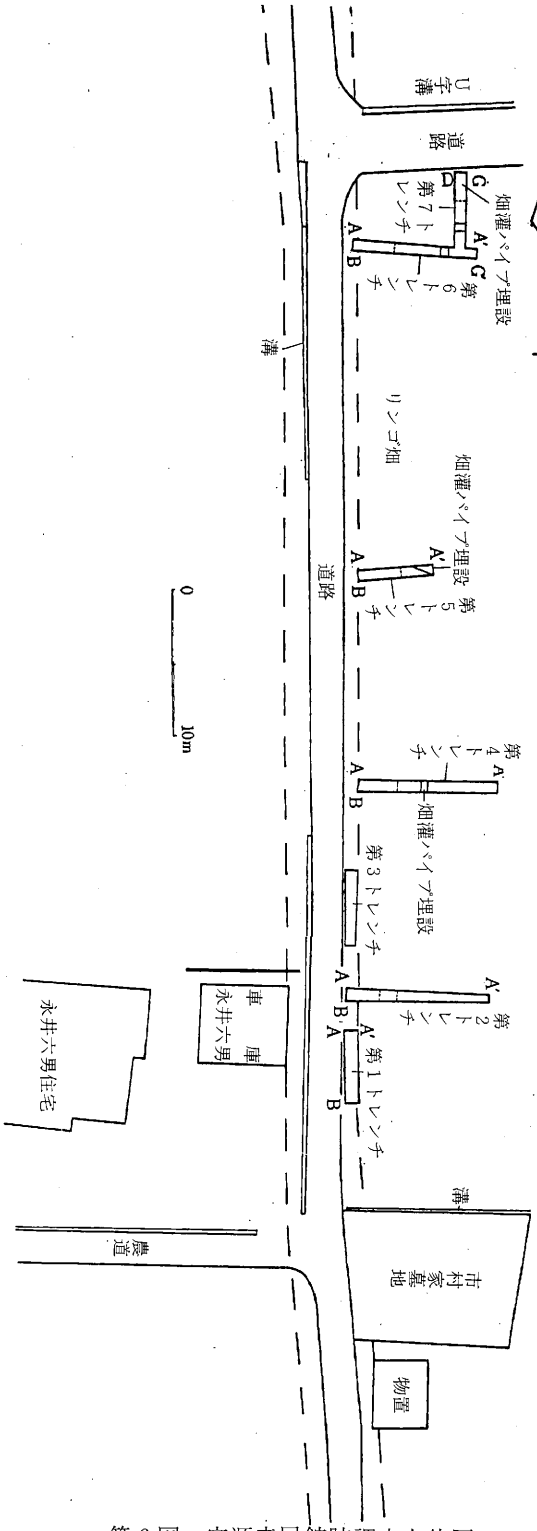
写真撮影と断面図・平面図は平行して行い、完了次第埋め戻し作業を行った。

12月22日　（土）

第５トレンチ、測図・埋め戻し。第６・第７トレンチ掘り下げ、写真・測図・埋め戻し完了。

第６トレンチ、上層、黄色土、堀底青色粘土層（グライ層）。土塁敷底上・黒褐土、下・地山黄色土。

第７トレンチ、堀側鉄分沈着層があった。但し堀底部分は、道路分にあり、調査不可能であった。




第６図　安源寺居館跡調査全体図

12月23日　（日）

発掘現場の現状復旧を行った後、発掘機材の搬出を行う。バックフォーの搬出。

### (3) 遺　　構

今回の調査は、限られた調査面積のため、土塁の敷幅の確認と堀の構造・規模を断面調査により、確認することにあった。

◦第１トレンチ　（７図）

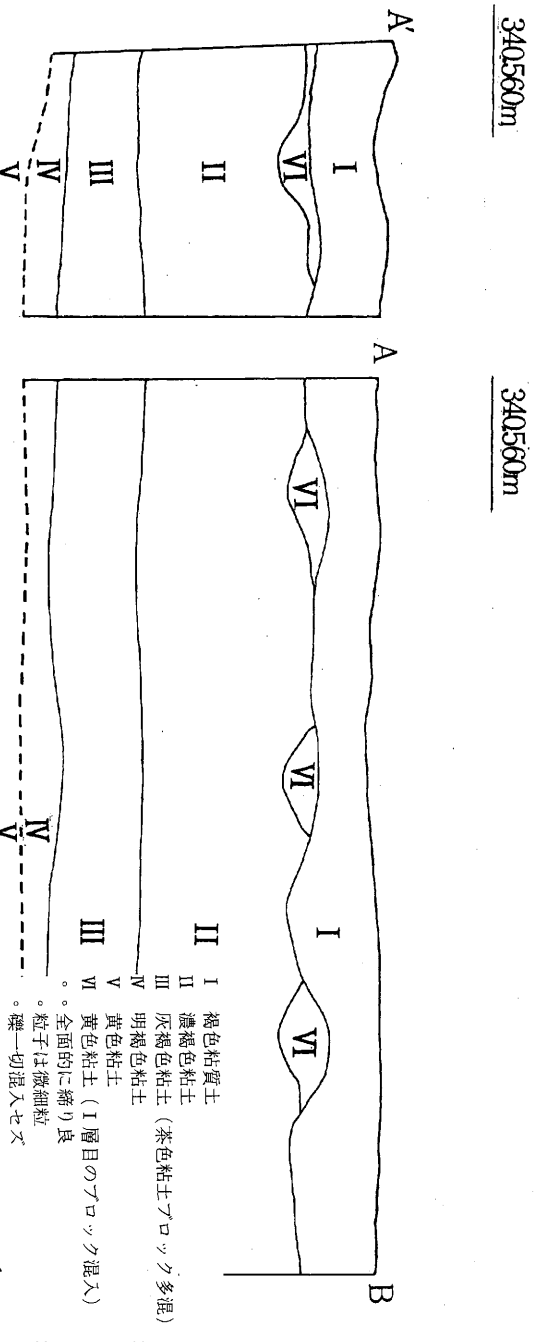
道路に平行して、長さ3.5ｍ・幅1ｍの面積を調査した。深さ1.3ｍまで掘り下げたが、堀底部までは達しなかった。

表土より20cm下に、１ｍ離れて杭（くい）跡状の部分があったが、地層より見て、新しい遺構と思われる。６層序に識別したが、堀の埋没土は粒子が細かく、礫の混入はなかった。

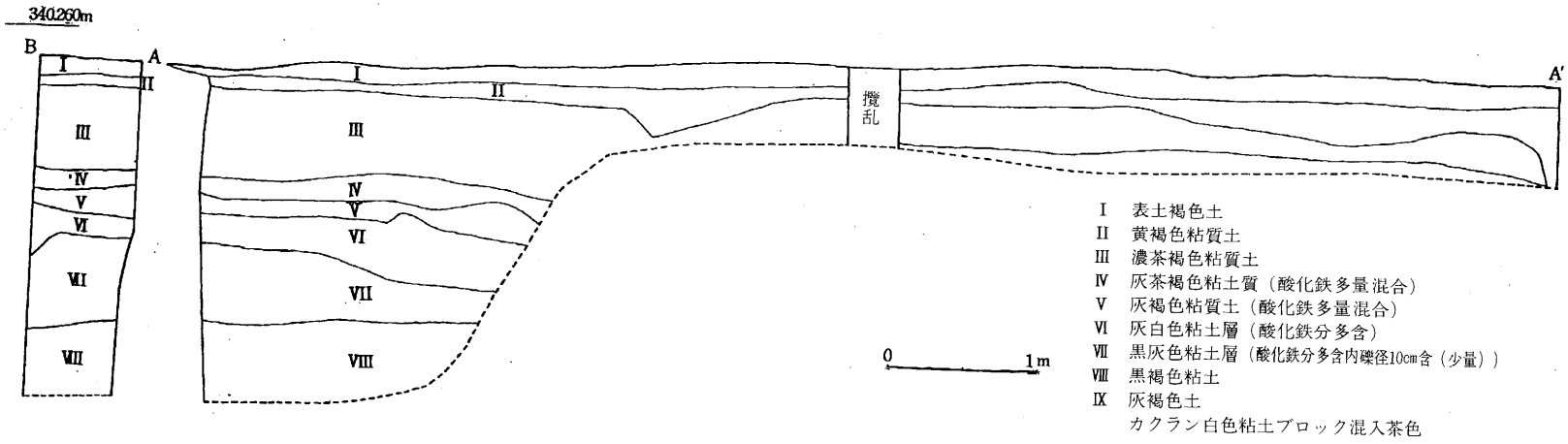
◦第２トレンチ　（８図）

道路と直交に、幅65～60cm・長さ9.5ｍ程調査した。

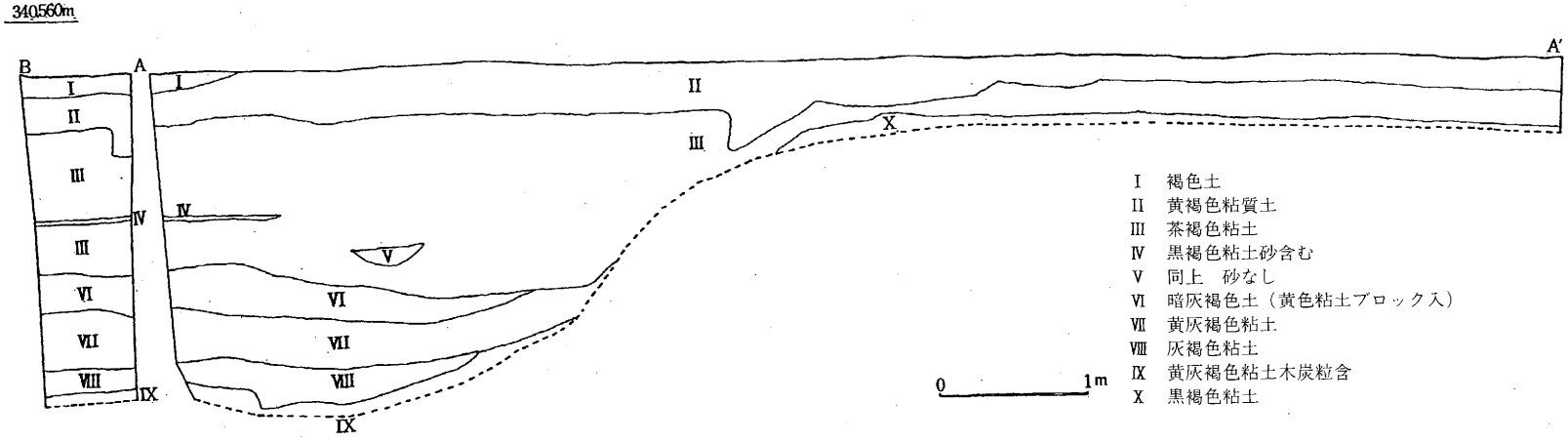
土塁敷部分は、深さ45cmで黄色地山土に達し、堀の部分は、深さ2.3で底部に達した。堀の西側部分は、道路のため形状がわからないが、底はＶ字状にならずＵ字状を呈し、傾斜面はおおむね45度であった。遺物は－180cmの所から、珠洲系陶器片が出土した。底部近くは木炭混入の黄灰



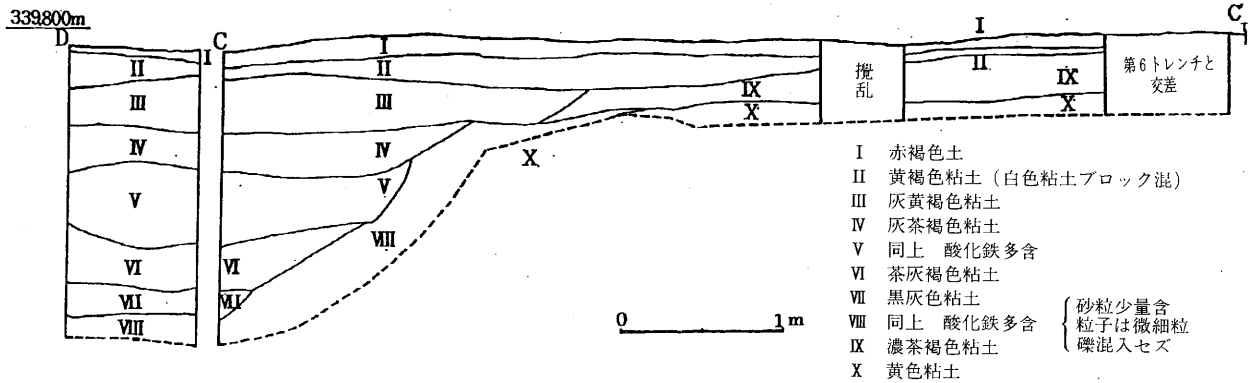

第７図　第１トレンチ断面図



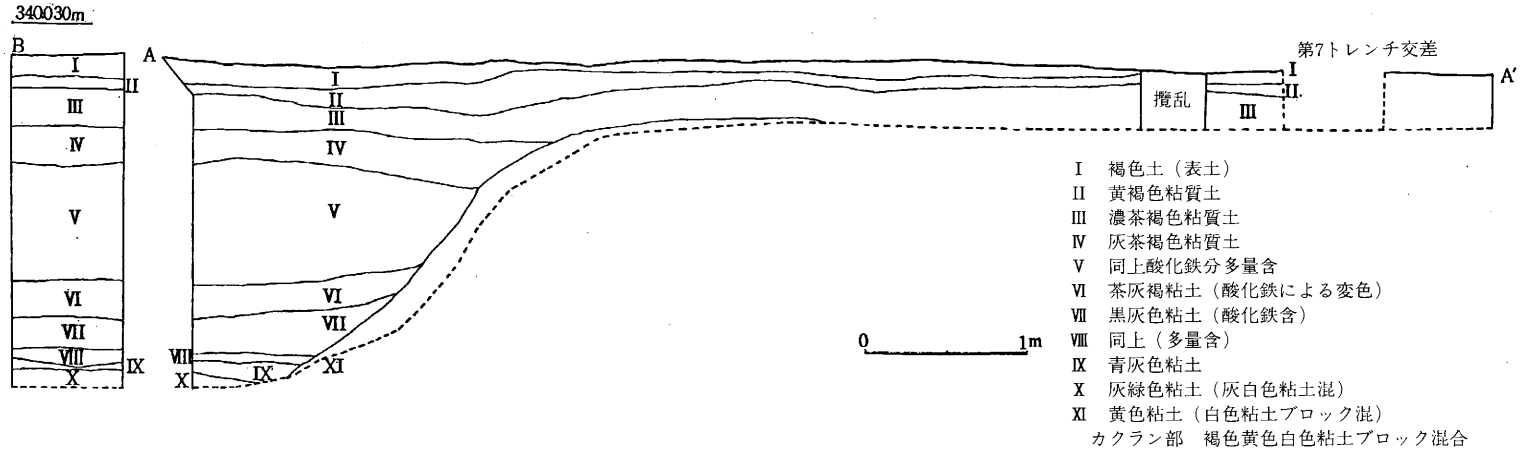

第9図　第4トレンチ断面図



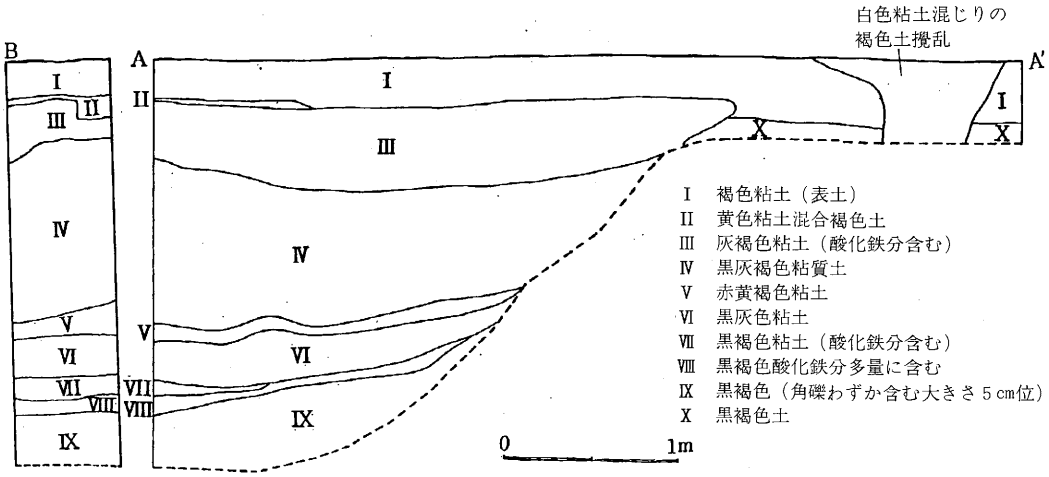

第8図　第2トレンチ断面図




第11図 第7トレンチ断面図




第10図 第6トレンチ断面図




第12図　第５トレンチ断面図

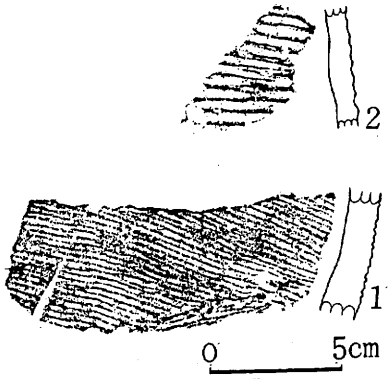
褐色土で、直上では黒褐色であった。

◦第３トレンチ

第１トレンチとほぼ同様で、説明は略す。

◦第４トレンチ　（９図）

道路に直交して、幅0.7ｍ・長さ10ｍを掘り下げた。堀の現状は、第２トレンチと同じで深さ2.3ｍであった。第７層の黒灰色土（－1.6ｍ）には、円礫径10cmのものが数個含まれていた。また、－220cmの位置から珠洲系陶器片が出土した。土塁敷の第３層は濃茶褐色土で、土塁構築の下層の東側で切断していた。これには黄褐色がのっていた。これは元の土塁構築土であって、削平されたものである。上には第１層の耕作土がのっていた。この規模から推して、土塁敷幅は約６ｍであったと推定される。




第13図　珠洲系陶器拓影図

◦第５トレンチ　（12図）

道路と直交に、幅0.6ｍ・長さ５ｍ掘り下げた。掘の形状は、前の調査地点と同じ45度の傾斜で、Ｕ字

形を呈していた。深さはやはり2.3m位であった。

堀の上層第２層、黄色と褐色の混合土層は土塁削平土であって、堀の埋没がほとんど終了する時点で、土塁の削平があったことを示している。第９層黒褐色土は堀底部上で、ここには径５cmの安山岩の角礫２個が含まれていた。

◦第６トレンチ　(10図)

西北の角近くの位置で、幅0.7m・長さ９m程調査した。

堀の形状は前者と同じで、深さは2.05mで前者より僅かに浅かったが、これは地勢に影響をうけたと思われる。堀埋没土の７層黒灰色土、８層・９層青灰色土、10層灰緑色土はグライ層であって、湿地であることを示している。第７層では、扁平な角礫１個・円礫４個が埋っていた。

◦第７トレンチ　(11図)

西北角の調査地点で、北側の道路と直交したトレンチである。内部は、第６トレンチと直交している。調査幅0.8m・長さ5.5mを掘り下げた。ここは道路がすでに拡幅されていたので、堀底までの調査はできなかった。堀の形状は前者と同じと思われ、上層の２層黄褐色土・３層灰黄褐色土は、土塁削平土と推定される。

### (4) 遺　　物　(13図)

昭和61((1986) 年以来、発掘調査を続けている市内の高梨氏館跡では、どの調査地点でも、中世土師器（かわらけ）が出土する。それに比べて本館跡は、調査面積の少なさもあるが、一片も出土しなかったのは不思議であった。堀底から珠洲系陶器片が出土しただけであった。

１は、胎土が白青色を呈した甕下半部の破片で、整形時の接合痕がある。叩き目は水平、或いはやや右下りに密に浅く、内面は横ナデされている。

２は、胎土が暗青灰色を呈し、叩き目は粗で深く、器壁は薄い。内部はゆるく凹凸している。破片にはカーブが無く、器形の復原は困難であるが、15世紀代の甕の形体にみられるので、両者とも15世紀代の所産と考えられる。

# 調　査　結　果

## 結　　語

安源寺館の発掘調査は、農道拡幅工事に伴うもので、実証的学問の考古学的調査は初めてのことである。

調査は短期間であったが、具体的に館の旧状を、一部ではあったが知ることができた。このような機会を得て積み重ねることによって、中世末期の地域の、具体的な支配者なり民衆の姿が復元できると期待されている。

成果の概略を記すと、堀の形状はU字形をなし、薬研堀でなく、戦国最盛期のきびしい様相からやや後退した形態で、堀幅約６ｍ・深さ2.5ｍ以下(土塁上からは約５ｍの深さ）であって、規模は劣っている。

また、近世以後、東面の一部を除いて埋没が進み、土塁の構築土の黄色土が上層にみられたことは、『長野県町村誌』記載図の如く、近代初期まで旧状を伝えていたことの証左である。

埋没の珠洲系陶器片は15世紀のもので、館の存続年代と考えられる年代より、１世紀古い様相のものである。当時この地域で使用された遺物が、埋没の進行とともに埋ったと考えられる。

土塁は敷幅５ｍ、高さは今回確認できないが、残存の土塁よりみて、高さ約2.5ｍが妥当な線と考えられる。この構築土は、地山層の黄色粘土で構成され、旧地表面の黒褐色土上に築造されていたことが判明した。

館の規模は、今回調査の西面は、土塁・堀を含めて88ｍの規模で、あと略測から南面は82ｍ、東面82ｍ、北面84ｍと推定される。

館の虎口（入口）はどこに設けられていたかの問題は、地勢上からと、『長野県町村誌』記載図から、東面中央に大手であったことが察知できるが、あとは不明である。

これは安源寺山城と有機的に結びぬく、有力な手がかりでもあるが、天正年間（1573～1591）に一時入館したと伝えられる、高梨氏との関係、その後の小領主や館の存続問題、山城との関係の究明など、今後に残された問題は大きい。

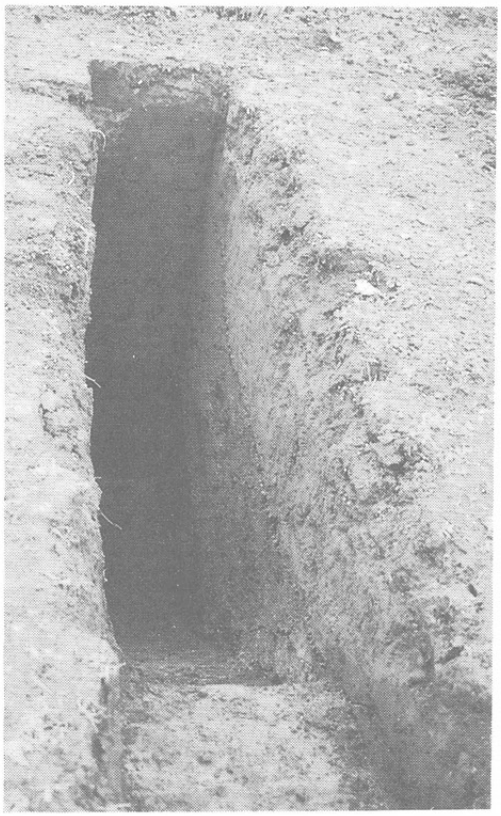
参考文献

栗岩英治　「替佐城」長野県『史蹟名勝天然紀念物調査報告』第二十集　1939
豊田村村誌刊行会　『豊田村誌』　1963
『日本城郭大系』第八巻　長野・山梨　1980
中野市誌刊行会　『中野市誌』　1981
『角川日本地名大辞典・長野県』　1990

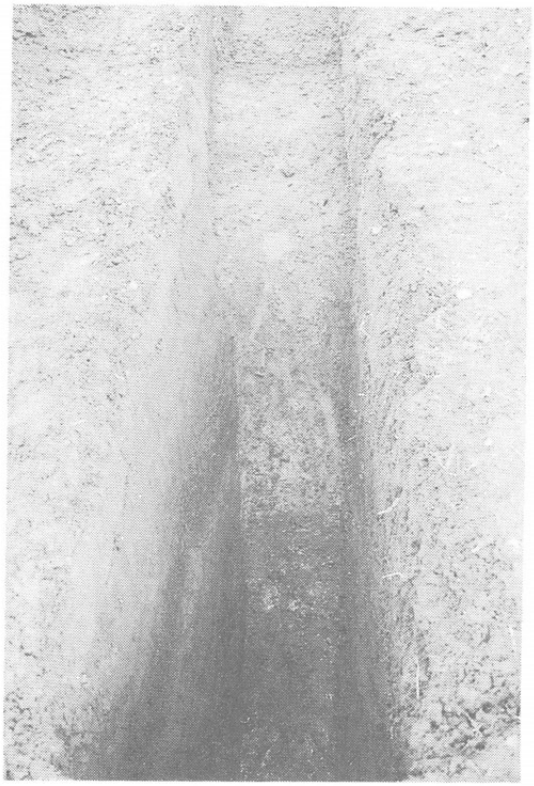
▲　東方から見た館跡（中央囲線内）

▲　館の残存土塁、右の凹地は堀跡、右後方の山は、城山。

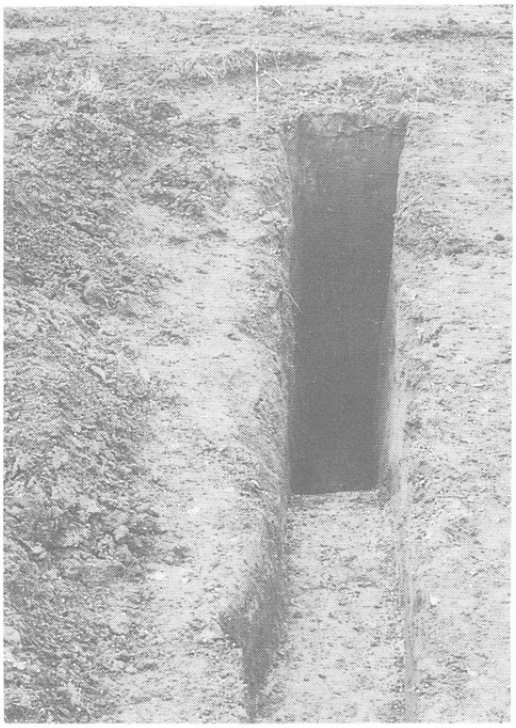
◀　南から見た調査地点。（館西面）道路の東側が堀跡。

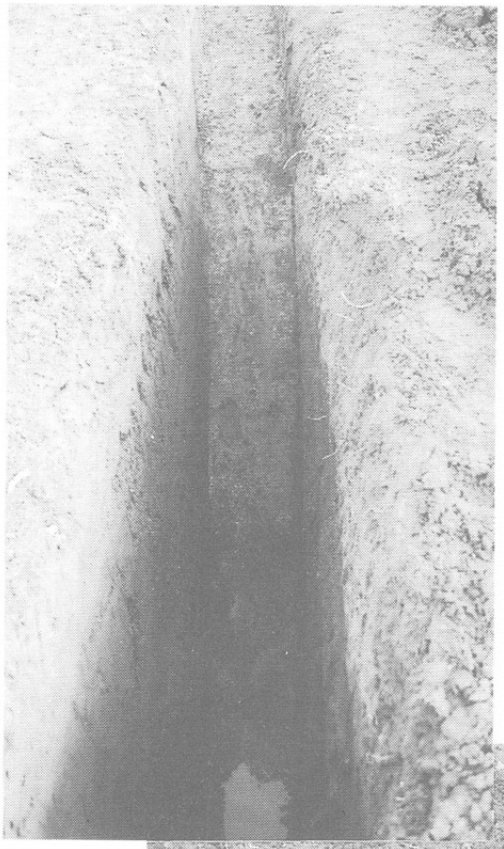


▲　第2トレンチ



▲　第4トレンチ　東側





▲　第5トレンチ

◀　第4トレンチ

▶　西面中央部の土塁位置の土層断面。第4トレンチ

◀　館の西北の角断面。第6トレンチ、第7トレンチ

▶　安源寺の山城本郭西の土塁西面

◀　安源寺の山城本郭西の土塁。

**安源寺館跡**

**緊急発掘調査報告書**

平成３年３月10日　印刷
平成３年３月20日　発行
編集・発行　中野市教育委員会
中野市三好町１－13－19
印刷　中野市　高錦堂印刷